様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：５２６０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ２１５８５

研究課題名（和文）即興型ディベートを用いた英語コミュニケーション指導法の開発および効果の基礎的研究

研究課題名（英文）The Method for English Communication in Classes Based on Parliamentary English Debate

研究代表者
延原　みか子（Nobuhara, Mikako）

東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・助教

研究者番号：８０７３７４０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では即興的英語ディベートが英語が苦手とされる学習者にとって、英語学習の動機づけになることを明らかにした。しかし、ディベートの評価の際に使用するジャッジシートにその教育効果が大きく左右される可能性があることもわかった。よってディベート教育の際に使用するジャッジシートの分析とそれに応じた学生の反応や、ディベート教育の後で実施した英語での質疑応答などに変化がみられるか検証した。ディベート学習をとおして、特に文法においてより正確な英語で話しているか、早口などにならず聞きやすい英語を話しているか、全体的な議論の構成が良いかもジャッジシートに加えることが必要だと結論づける。

研究成果の概要（英文）：This study mainly examines the content of the judging sheets used in schools and colleges in Japan to determine whether they are appropriate for correctly evaluating debates. Results find that the current sheets in general lack evaluation points such as (1) accuracy in English usage, especially in grammar, (2) whether the English speech is listener-friendly, and (3) whether the teams' overall argument structure is good.
To achieve more accurate evaluation in classes, this study proposes that the evaluation items should be revised for further advancement, so that English debating is used as a teaching method, and for motivating students to learn English as a second language.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育　ディベート　評価　第二言語習得

１．研究開始当初の背景

世界で活躍するものづくりのスペシャリストを育成するという基本的な教育概念の高専における継続的なディベート指導に関する研究は多くない。また、通常の日本人の英語教員が担当する英語の授業では、文法・読解・パラグラフライティング等の授業が中心である。学生に関して言及すると、アウトプットが苦手な者が多く、コミュニケーション能力の向上が必須である。そのために必要な活動の一つとして、ディベートの導入を試みた。

２．研究の目的

英語教育改善のため、学生に英語ディベートの授業を実施し、多角的に分析することで、効果的な英語教育実践方法としての英語ディベートに必要な環境要因の提言を目指す。ディベート教育はそれ以外に通常行っている他の英語の授業と相互に作用しながら学生の英語力向上・授業の質改善に寄与し得ると仮定できる。

３．研究の方法

・即興的英語ディベートを授業で実践し、ジャッジシートを作成、回収し、データ分析を実施。
・ディベートの授業前後において、学生に授業前・後のアンケート調査を実施。
・ディベート教育の際に使用するジャッジシートの分析とそれに応じた学生の反応や、ディベート教育の後で実施した英語での質疑応答などに変化がみられるかの検証の実施。
・外部の大会や学会、練習会などにおけるディベートの情報収集の実施。
・本研究では従来の、高専におけるコミュニケーション力の向上を課題とする英語教育の改善、学習者である学生の英語能力向上へのアプローチとして、英語でのコミュニケーション活動の指導を基軸として、英語ディベート指導を軸とするコミュニケーション活動を実施するなか、ディベート指導の実施前と後の各TOEICの試験の点数と英語ディベート能力の変化において以下の点について明らかにする。

(1)高専における通常の英語の授業（Reading中心）と、本研究で実践する英語ディベート指導は、学生の英語力向上という面で相互に関連していること。

(2)将来、日本のものづくりのスペシャリストの役割を果たす高専生の、英語学習におけるやる気、やりがいを呼び起こす動機づけのひとつとして英語ディベートは良い学習内容に成り得ること。

(3)昨今、高専におけるコミュニカティブな英語教育の改善がなされつつあるが、価値観や意見の違う相手とでも英語でコミュニケーションができる学生の育成が可能であり、英語力も TOEIC 面(Listening/Reading)と英語ディベート能力（4 技能）の両面で向上が見られるということ。

４．研究成果

本研究では即興的英語ディベートが英語が苦手とされる学習者にとって、英語学習の動機づけになることを明らかにした。しかし、ディベートの評価の際に使用するジャッジシートにその教育効果が大きく左右される可能性があることもわかった。

ディベートを初めて体験した学生は、その思考方法の違いから、少なからずカルチャー・ショックを受けたことが分かった。これまで国語や社会の授業でディベートをやったことがある学生もごく少数ではあるがいたが、その学生も含め、考えること重要性、簡単なことでも、他者に理解してもらうことは大変な作業であることが実感できたようだ。

回を重ねるごとに、使う語彙数が増えたり、speaker の言うことを注意深く聴いたり、的確な情報を収集して、工夫して試合を行っていることが明らかになった。

研究期間内に、急な校務変更・研究代表者の体調不良等があり、途中の進捗が遅れたことは甚だ残念ではあるが、高専で基礎的な語彙を利用したシンプルな形のディベートを継続的に行うことは、意義があり、高専を卒業後エンジニアとして就職した後、または大学・大学院に就職した後の授業や社会生活で大いに役立つスキルになるはずである。また、学内の事情で継続的なクラス担当が不可能であったため、同じクラスで継続した speaking 活動、ディベートができなかった。しかしながら、speaking 能力において、ある一定の向上にはつながったといえる。

このように、ディベート教育の際に使用するジャッジシートの分析とそれに応じた学生の反応や、ディベート教育の後で実施した英語での質疑応答などに変化がみられるか、検証した。ディベート学習を通して、特に文法においてより正確な英語で話しているか、早口などにならず聞きやすい英語を話しているか、全体的な議論の構成が良いかもジャッジシートに加えることが必要である。また、英語ディベートは、英語の基礎力を向上させ得ると結果からも、TOEIC 等の外部試験等のスコア向上の一助となり得るであろうと考えられる。

This study examines the content of the judging sheets used in schools and colleges in Japan to determine whether they are appropriate for correctly evaluating debates. Results find that the current sheets in general lack evaluation points such as (1) accuracy in English usage, especially in grammar, (2) whether the English speech is listener-friendly, and (3) whether the teams' overall argument structure is good.

To achieve more accurate evaluation in classes, this study proposes that the evaluation items should be revised for further advancement, so that English debating is used as a teaching method, and for motivating students to learn English as a second language.

In recent times, holding debates in English has become popular in the Japanese education system, especially at leading universities that aim to nurture students as global human resources and have set goals to develop teaching debate in classes. It was seen that after attending debate classes, students were able to fluently express themselves in English without experiencing any feelings of doubt or any pre-existing bias. Moreover, the questionnaires revealed that they felt exceedingly motivated. In this study, it was observed that attending debate classes caused the students to be (1) more assertive, (2) communicative, and (3) motivated to studying. Therefore, to improve the standards of education in Japanese universities, it is necessary to expand and develop the practice of debating in English at other Japanese universities. In the near future, this effective teaching method should also be introduced to high schools and secondary education. *Quoted by the abstractss in the papers written on the right side.*

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
査読有
①Mikako Nobuhara, An Evaluation of Debate Judging Sheets for Judging for English Debates (14th Tokyo BESSH Conference Full paper Proceedings),2016

〔学会発表〕（計４件）
国際学会発表 全て査読有

H28 年度
①(poster) Mikako Nobuhara, An Effective Approach for Slow learners for Studying English as EFL through Media and Films(ACLL2016)

② (oral) Mikako Nobuhara, Developing Teaching Materials for English Communication Classes to Motivate Low-Proficiency Students in a Japanese College (ICBTS2016)

③(oral) Mikako Nobuhara, An Evaluation of Debate Judging Sheets for Judging for English Debates(14th Tokyo BESSH)

H27 年度
④ Mikako Nobuhara, Analysis of Debate Classes and Potential Factors Related to Leading Japanese Universities' Education (2nd Tokyo BESSH Conference)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
延原　みか子(NOBUHARA, Mikako)
東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・助教

研究者番号：80737403

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者　なし　研究代表者 1 名による研究
(　　)